

神奈川県考古学会

考古かながわ 第57号

国指定史跡 綾瀬市神崎遺跡 —資料館開館とこれから—

綾瀬市教育委員会 井上 洋一

綾瀬市神崎遺跡は、神奈川県中央部を流れる相模川の支流、目久尻川に面した標高 24 m、沖積地との差が 11 m ほどの台地上に位置します。

綾瀬市史編集事業に伴い、平成元年（1989）に初めて発掘調査が行われ、弥生時代後期の環濠集落であることがわかりました。集落の形は楕円形で、規模は南北 103 m、東西 65 m、面積 5,000 m² ほどです。環濠は幅、深さともに約 2 m で、断面は V 字形を基本としています。平成元年以降、平成 22 年（2010）の史跡指定にむけての調査、平成 25 年（2013）の公園整備に伴う調査等を実施していますが、これまで環濠集落に伴う住居跡は 18 軒確認されています。

この遺跡の特徴は、出土土器の 95% 以上が東海地方の土器に酷似している点です。胎土（土器の土）は分析により遺跡周辺の土であることがわかりました。したがって、土器は運ばれてきたのではなく、この地で作られたと考えられるため、集団の移住が明らかになったのです。さらに、住居跡の形にも東海地方の特徴が見られました。

このように、国家の成立に向けて日本列島が揺れ動く弥生時代に、200km 以上を人々が集団移住したことを示す遺跡であること、さらに、環濠集落全体が良好な状態で残っていることが評価され、平成 23 年（2011）2 月 7 日に国史跡に指定されました。その後、平成 26 年（2014）からは本格的に神崎遺跡公園として整備が始まり、平成 28 年（2016）5 月には資料館が開館しました。公園部分は平成 29 年（2017）に一部が、



資料館から見た遺跡全景

平成 30 年（2018）には全面開園の予定です。

神崎遺跡資料館は遺跡の隣接地にあるため、2 階のバルコニーからは環濠集落が一望できます。また、館内には環濠の実物大の復元模型等の展示のほか、土器の破片も引出しに保管されており、自由に見られるようになっています。

ところで、その展示の一つに集落の復元模型があります。この模型の環濠には橋等の出入口の施設がないので、疑問を持つ方がいるかもしれません。確かに、他遺跡の事例から考えて、環濠のどこかには出入口に関係した施設があった可能性は高いと思われます。しかし、発掘調査を遺跡の一部しか実施していないため、これまで調査した環濠部分からは、出入口に関する遺構は検出されませんでした。そのため、復元模型には出入口が作られていません。

それならば「全面を掘り上げてしまえばいいのでは」と考えるかもしれません。しか



環濠の平面表示

し、発掘調査は一度掘ってしまえば、やり直しができないのです。考古学という学問も年々進歩し、一昔前では想像がつかなかったデータが収集できるようになってきました。現在、遺跡を全部掘り上げてしまったならば、今よりも発掘技術が進んだ将来、必要なデータが収集できなくなります。そのためにも、遺跡はできるだけ現状で保存するのがいいのです。「掘りたいけれど、掘ってはいけない」そんなジレンマが史跡の整備にはつきまわっているのです。現在、城郭の堀の調査では地中探査等の非破壊調査も活用されています。環濠の調査についても、発掘調査によらない方法を検討していかねばならないでしょう。

ところで、遺跡公園というと、何棟も復元住居

が建っているイメージがありませんか。しかし、神崎遺跡公園には復元住居を作る予定がありません。竪穴住居は半地下式なので、復元住居を作るには、地下の遺構を保護するため盛土が必要です。神崎遺跡の場合、盛土を施し、地形を改変すると、平坦な台地に移住者がムラをつくったという当時のイメージが壊れてしまいます。また、環濠集落としては小型の部類に入るため、一部の住居を復元するよりも、見る人が遺跡全体を想像できる方がいいという方針で整備を進めてきました。そのため、復元住居は作らないのです。しかし、復元住居の長所も否定はできません。そこで、遺跡保存と復元住居を両立させる方法を現在模索しています。なお、公園には環濠や住居跡等の平面表示（位置と大きさの表示）がされ、説明板が設置されます。

この拙文が皆様のお手元に届く頃には、公園の北半部が完成していることでしょうか。まだ、資料館に来られていない方はもちろん、これまでに来られた方も、一部開園した公園を是非見に来てください。全面開園（史跡整備の完成）は1年後になりますが、整備の途上が見られる珍しい機会かと思えます。市内に駅がないため、交通の便は良いとは言えませんが、足を運ぶ価値はあるのではないのでしょうか（写真は平成29年1月撮影）。

神崎遺跡資料館（入館料：無料）

所在地：綾瀬市吉岡 3425 番地 5

開館時間：9時から17時

休館日：月曜日（祝日にあたるときはその翌日）

1月1日から3日及び12月29日から31日

アクセス

海老名駅より：神奈川中央交通 長後駅西口行き「根恩馬」バス下車

長後駅利用より：神奈川中央交通 海老名駅東口行き「根恩馬」バス下車

神奈川県考古学会

平成28年度第3回見学会

日時：2017年2月18日（土）10:00～

場所：横須賀市 国史跡 猿島要塞

費用：2000円

※詳細は後日送付いたしますハガキをご覧ください。

考古学雑記

今回から、「セピア考古学雑記」改め、「考古学雑記」として、神奈川県の考古学・埋蔵文化財を支えてこられた皆さんにお話を伺っていきます。再開の第1弾は、曾根博明さんです。インタビューは2016年12月4日に行いました。曾根さんには事前にお渡しした項目に沿って既に文章におまとめいただき、これにインタビューの内容併せて掲載させていただきました。

1. 考古学を志したきっかけ

高校時代、仏教美術に興味があって、最初から考古学に関心があったというわけではなかったんです。ちょうど、大学入る前の時期に、海老名市の相模国分寺を国が発掘調査するという機会がありましてね、友達にそこの発掘と一緒にいかないかと誘われたのが最初のきっかけです。

そこでは、奈良の国立文化財研究所の町田章さん、岡田茂弘さん、田村晃一さんなど、その当時の第一線の研究者が私たちと一緒にスコップ持って掘ってくれます。坪井清足さんなんかに怒鳴られたりもしながらね。その土の中から奈良時代の瓦なんかバンバン出てくるわけ。そういうのって、ものすごく新鮮。第一線の研究者と汗水流しながら調査をやるっていうのはちょっとない経験で、感動を覚えましたね。それが考古学に関わりを持った最初。志というか考古学とお付き合いするようになったのはそれが最初でしょう。

一入学前に大きなインパクトがあったというわけですね。

2. 学生時代

昭和41年に大学に入ったのですが、この時期は学園紛争まっさかりでした。だから前期試験がすつとぶとか、試験がレポートにすり替わるとか、授業がありませんとかが普通だった。学生側のバリケート封鎖と大学側のロックアウトの繰り返しで。こと試験時期になると何故かバリケート封鎖多いんだ(笑)。それで、突然授業がないとなると身体が空くというか、何かしなきゃいけないと思っていて、その頃、遺跡の調

査って結構面白いなって思うようになっていたから、あちこちの発掘調査に行くようになった。

その当時って、日本全体が開発志向の雰囲気の中で、文化財のことなど無視されることも多

かった。発掘調査は行政が掘るというケースもあったけれど、どこかの大学の考古学の先生に調査団を形成してもらって掘るといって、非常に微弱な調査体制の形式で調査が行われていたんだよね。神奈川でもそれがしばらく続いていた。ブルドーザーに追まくられながらの調査なんてのもあった。私が行政に関わるようになった頃というのはそういう状況が当たり前だったな。

今は発掘調査をやるのは当たり前と思っているかもしれないけど、行政がひたすら事業主にお願いしてなんとか調査に持ち込むという現実があるわけで、役所の担当者も大変でしたよ。今も相当苦労しているのだろうけれど、少なくとも私たちの時代は、事業主とはいろいろあった。業者にしてみれば、調査協力っていうのは建設工期の遅れと費用負担の両方がかかってくる。一日工期が遅ればいくら金利負担が増えるという中で商売しているわけだから。今はそれなりに原因者負担が安定化してきたのかな。

3. 大和市在職時代

私は昭和48年に役所に入った最初の2年か3年は学校建設に関わっていました。当時、高度成長期で地方から多くの人たちが働き手として都心部に流入してきて、住む場所として宅地開発が盛んになるとともに、人口が急増する。すると学校も必要になってくる。あの当時で新設校を年二校くらい建てていて、その担当をしていた。その経験は後々文化財保護をやるときにものすごく役に立った。

一文化財保護行政への異動の経緯は？

大和市に入った当初は、世の中は開発志向でした。



だから埋蔵文化財のことをやりたいとは思っていなかったんだけど、就職して給料貰うんだから遺跡の所在地ぐらいは押さえておこうかなと思って、歩き始めて遺跡の分布地図を作成していた。そしたら、そんなことをやっているってことを聞きつけた、上司が文化財担当に誘ってくれた。以降数年を除いて33年間文化財保護行政に従事しました。

その頃の神奈川県内の市町村で文化財担当者がいたところは4ヶ所かそんなものですよ。いずれにしろ町全体、市全体、国全体が開発志向でやっているわけだから、味方は全然ない。そのなかで、どうやって理解を深めるかっていうところからやらなければいけない。当時は人員もお金も何もなかった。そうすると市町村それぞれの能力に差が出てくるから、各方面への齟齬が生まれる。だからそれを標準化しなきゃいけないってことで、神奈川県内の市町村の連中がみんなで集まろうじゃないか、情報交換会やろうじゃないかということになっていったんだ。

一それが現在の連絡協議会の発端なんですね。

必要性があつての発起だった。少なくとも情報は共有しないとね、まあ…、市町村によっては職員がいっぱいいるところもあれば、いないところもあるわけだから、どこの市町村も全部同じことをやれているのは難しい。どうしても対応が分かれてしまう。全て一緒にすることは難しいにしても、少なくとも隣の市町村が何をやっているかっていうことは知っておいてほしいという認識だったね。

4. 新たな試み

神奈川県内に民間調査組織が最初期に調査したのは、縄文時代草創期の土器が出た上野遺跡第2地点っていう大和市の遺跡。当時、国内で膨大な件数の調査をやらなければいけない中で、市町村が職員をバンバン採用するなんていうことを一朝一夕にできるわけがない。そこで結果的に民間調査会社の導入となっていたんだ。確かに本来、行政が遺跡を調査するのが当たり前で、民間調査組織に代行させるというのは、ある意味その辺のこだわりがあるわけだけだね。なにも真似しろって言ったわけではないけれども、どこの市町村も民間調査組織の導入を必要とした状況だったわけだよ。でもやっぱり、本当はやっぱり行政が責任持ってやるべきことなんじゃないの？これは。

一大和市では子供向け漫画が作られましたね。

第一巻ができたのは平成2年じゃないかな？たしか。そのあと毎年一冊ずつ。原案は私が作って、漫画家さんをお願いしていました。その漫画家さんも学習漫画を担っているような方だったから、石器や土器を絵にするのは初めてじゃないと思うんだけど、やはり石器の実測図とはいかないから、ちょっとなーと思うところもあった。でもやっぱり一般市民にもわかってもらわないことにはね。まあ、あの手この手と理解を深めてもらえるように、こちらも努力して作らなくちゃいけないだろうし。やっぱり文化財保護の仕事やっていて一番苦勞するのは、最終的に一般の市民に文化財の大切さをどうやって理解してもらおうかってことでしょう。大和市は博物館がないから、文化財を理解してもらおう機会っていうのはすごく少ないわけ。だからよく出前博物館っていうのもやっていたんです。小学校に土器や石器をもって行って、石器の作り方とか土器はどうやって文様つけるとかの授業をやった。毎年新学期が始まる5月から夏休み前くらいまで、結構あちこちの学校からお呼びがかかって。それも普及啓発の延長ですよ。そういうのはやったほうが良いよ。味方を増やす努力はしなくちゃ。

一早い段階から行動をおこしたのは？

わりと私の直属の部下というのは文化財の保護で頑張っている感じの人間が多くて、あるとき3人ドンと入ったことがある。おかげで結構強気になれたね。それと一ヶ所にいて異動しないっていると、セクションで一年間のタイムスケジュールが自己管理できちゃう。だからこのやり方は今までこうだったんだけど、このままで良いのですかというような主導権を取れちゃう。だからそういうことを繰り返しながら少しずつ少しずつ前進って感じでやってきたんでしょうね。その間には状況が良い時もあるし、これから先真冬だなあと思うような時期もありましたし。状況って必ず動くから、四方八方様子を見て、いけると思ったら行けばいい。

5. 印象に残っている遺跡はどこでしょうか。

いちばん華やかな調査をやったっていうのは、縄文時代草創期の上野第1地点の調査だろうね。ただ私は縄文草創期なんて全然興味がなくて(笑)。何で俺がやらなくちゃいけないんだってね。草創期の一番古

い時期に隆起線文系土器というのがあるんだけど、その下層から無文土器が出てくる。しかも尖頭器の形状(後日、舟底状の細石刃核となる)もなかなか面白い。この遺跡では、無文土器の出土層位と隆起線文土器のそれとは厚さ 30cm くらいの違いがあって、下の無文土器は完全にソフトローム層中から出てきて、隆起線文土器は富士黒色土層 (FB) の真ん中よりちょっと下から出てきた。そんなところから出たものだから、最初は草創期の隆起線文土器じゃないんじゃないかと。早期の野島式土器じゃないかと言われたこともあったけど、最終的には草創期の隆起線文土器になってる。日本最古の土器が出たということで、毎日新聞全国版のトップページで紹介され、他課の職員との調整もやりやすくなって、おかげで 2、3 年のあいだは余分に文化財保護関係の予算の上乗せできた。

一やはり、ほかの関係部署への働きかけというのは重要になってくるんですね。

一番難しいのは、我々は土地を相手にしているところ。遺跡の保護というのは最終的に土地をどうするのかという話になる。だから、市が発掘するばかりじゃなくて、遺跡という文化遺産を残すんだということをもう一度あらためて考えなければと常々思う。遺跡の発掘調査とは基本的に遺跡の破壊なんだよ。だからやっていることの重大さをちゃんと理解してもらいたいと思う。タコが自分の足喰って生きてるという現実を知るべきだと思う。

市町村担当者は自分の地域に遺跡が所在するのだから、どうしたら遺跡を保存できるようになるかを考えてほしい。簡単なことではないことは重々わかるけれども、町づくりであるとか歴史的文化環境の整備みたいな言い方はしているけれども、やはり、そういったところまで持っていけるような仕事にしないと遺跡が壊れていく。最終的に発掘報告書で考古学を勉強するような二次資料、三次資料で考古学を勉強すると文献学になってしまう。それは考古学じゃない。

6. 神奈川の考古学を取り巻く現況について

都市計画などの情報をもっとしっかり得ていた方がいいね。例えばここに公園を作りますと情報があった時に、公園はベンチがあって木が植えてあればそれで良いのではなくて、同じ公園作るにしてもここに著名な遺跡があるという文化的な支援ができれば良いね。

公園を造る側や都市計画をやる側にそれらが伝わっていないことが問題なんだと思う。どこも似たような町ばかりでしょ？例えばもう一步踏み込んで、“風格ある町づくり”をしてみたいとか、“歴史的な文化環境”とか、やり様は色々あるんじゃないかな。逆に文化財の保護も、そういう意味から位置付けられることもあるだろうし。

一神奈川県考古学会のような団体が働きかけてくるとしたら、何を期待されますか？

当然、行政とは違う組織なわけだし、そういった意味ではいろんなことができる可能性はあるんだろうね。ただ、みんなで考えた方がいいんじゃない？皆さんは基本的に学術研究団体にいるわけなんだから、研究団体の視点でもって、行政にアプローチすれば良いと私は思うけど。行政とお友達になる必要はない。まして行政の下請けなんてあっちゃいけない。県考古学会は行政の人じゃないよ。研究者として取り掛かっていくことだと思うよ。私も県考古学会の設立メンバーの一人ですから。最近ではさぼってあんまり出て行ってませんけど(笑)。

一今年で発表会は 40 回を迎えました。

私も歳をとりましたね。第 1 回目から私は出席していたはずなので、40 年過ぎたのか…。

7. 現在の活動～仏像の研究等～

仏像は高校時代から興味を持っていて、仏さんの本はいっぱい買ったよ。高校時代は有り金そういうものにつぎ込んで、あちこちの仏像を見に行っただけ。そのときには研究をすとかしないとかじゃなくて、せっかく遊びながらウロウロするんだったら仏像は拜んでいかなくちゃってという思いだった。

一定年退職後に、大学院で仏教美術を研究されたというのは原点に立ち返ったということでしょうか。

そうなのかなあ。修士論文が厚木の金剛寺さんで、今は曹洞宗に変わっていますが、創建当初はたぶん泉涌寺派で、鎌倉の覚園寺さんとかと非常につながりが深いお寺なんです。その金剛寺さんの地藏菩薩で修士論文を書きました(『考古論叢神奈河』20号掲載)。

一現在のご興味は？

今仏像ではね、なにかいい方法がないかと思っているんだけど、神奈川県内には平安時代の仏像って 100 体以上あるんだよ。あれはどこで造っているんだろ

うっていう、考古学やっている人間は、土器や石器を見るたびにこれはどこで作っているんだろうということについて考えるわけじゃないですか。可能性があるとする、中央から持ってくる、それから国衙に工房があったかどうか。ただし仏様の工房はちょっと国衙回りじゃ無理かなとも思う。そうすると中央の大寺院の工房で…？

ただ仏像をみていくと地方色があると言われる仏像がある。地方色があるってことは地方で造っているということで。すると、そういう仏師を置くような大寺院というのは神奈川県内にあるのか否か。だから今もう一度県内の仏像を洗い出して、地方色とか仏師に関わるようなデータってどの程度わかっているのか点検を始めています。やはり中央の寺院から抱えてきているんだろうと思うのんだけど、そうすると中央と同じ顔をしてなきゃいけないわけで。そんなところに注目してもう一度勉強し直そうかと思っています。

—それでは、本日はお忙しい中、どうもありがとうございました。

おまけ

(インタビュー終了後、ソネ会こと西相模考古学会の発足の経緯についてもお話が及びました)

当時は、基本的に杉原荘介の南関東土器編年をどうやって、西相模で合理化させるかっていう問題があって、そういう状況のなかで大きな遺跡をだいたい掘るようになり、もう間もなく報告書も書かなくちゃいけないっていう状況になってきて、一度本当に南関東の編年でいいのか、平塚市王子台遺跡・向原遺跡、それに秦野市根丸島遺跡に海老名市本郷遺跡、厚木市子ノ神遺跡、その5遺跡を中心に、確認しようということで始めた弥生時代の勉強会が西相模考古学会ですよ。でも実際は組織の名前がなかったんだよ。『西相模の土器』という検討内容の報告を刊行する際に、その名称を一時的に使ったが、それ以降は西相模考古学研究学会という名です。検討報告刊行の3、4年前からは通称でソネ会といって集まっていた。弥生時代からカマド出現期までという時期が限定されていて、しかも地域は西相模にこだわっている人間ってというのが入会条件だから、極めて、かつよほどのマニアックな人間の集まり。

今、機関誌の「西相模考古」が25号まで出ている。

つまり25年も経つただけだけど、よく25号も出たよなあ。

—表紙が黄色と黒の縞々の「西相模考古」…

そう、あれは、初期の頃は多くが阪神タイガースのファンでね。東海大学で研究会やったときなんか、みんな甲子園(兵庫県神戸市)行かないかってという話になり、その足で行ったりもしたんだよ、車並べてね。

人名・用語解説

相模国分寺跡：聖武天皇の詔によって建立された国分寺の1つで、奈良時代(8世紀中期)の創建とされる。昭和40年から神奈川県初の国営調査が行われ、中門・講堂・金堂・塔を備える法隆寺式の伽藍が発見された。現在は相模国分寺跡歴史公園として整備。

町田章：元奈良国立文化財研究所所長。長屋王家木簡の発見が著名。

岡田茂弘：国立歴史民俗博物館名誉教授・東北歴史博物館元館長。

田村晃一：青山学院大名誉教授。

坪井清足：元奈良国立文化財研究所所長、元元興寺文化財研究所所長。

上野遺跡第2地点：大和市月見野上野遺跡第2地点。玉川文化財研究所が調査を実施。

漫画の本：『漫画やまとの歴史』大和市の刊行物。先史～昭和までの全5巻。現在1巻が絶版。

王子台遺跡：平塚市北金目所在(東海大学東側の校舎新設に伴う緊急調査、東海大学が発掘)。

向原遺跡：平塚市上吉沢字向原に所在。配水池建設に伴う調査。

根丸島遺跡：秦野市。1975年7月～1977年10月まで調査。

本郷遺跡：海老名市本郷。富士ゼロックス工場建設に伴う調査。

子ノ神遺跡：厚木市戸室小学校建設に伴う緊急調査。厚木高校OB「歴史と文化を知る会」による指摘で厚木市教委が発掘調査団を組織、団長日野一郎氏、1974年7月～1977年7月調査。

泉涌寺派：京都東山の泉涌寺(せんにゅうじ)を本山とする真言宗泉涌寺派のこと。中世に隆盛した北京律(ほっきょうりつ)の拠点で、皇室の菩提寺として著名。

平成 27 年度第 2 回見学会参加記

川崎市民ミュージアムを見学して

片山 翔太

今回、私が川崎市市民ミュージアムを見学して印象的だったことは、旧石器時代に行われた「海洋渡航」、そして黒曜石の「キャッシュ（備蓄）」についてでした。普段、学校や発掘現場にて、黒曜石が採れる産地は決まっています、その中でも信州や神津島で採れるものは質もよく、よく現場で採集されるものもそれが多いということは学んでいましたが、今回川崎市市民ミュージアムを見学したことで、旧石器時代の人たちが遠隔地まで危険を冒してわざわざ赴き、資源を手に入れることの意味、またそれらの重要性について具体感をもって再確認させられました。

今のように地図や海図がない時代、もちろん今あるような立派な船も、船をつくる材料や技術もなかった時代にそれでも海を渡って資源を取りに行く。当時の人々にとって黒曜石というものはどういうものであったかを改めて考えさせられました。また、まだ使用可能な、加工前の状態の黒曜石が相模原市でまとも出土した様子が写真で展示されていました。古代人は手に入れた黒曜石をすぐには使わずに、今後のために備蓄していたようです。

一体、現代に生きる僕らと何が違うのでしょうか。働いて得た給与をすぐに使わずに貯金して、必要になった時のためにとっておく。危険な旅だと分かっていたら綿密に計画を立て、必要になるものを用意し出発する。今を生きる人たちと、根底は変わらないのではないのでしょうか。道具を作って、美味しいご飯を作って、旅をして、計画して。

きっと、海流や古環境を想定し、古代の生活を推察するに至るまでには、遺物や遺構を正しく見極め、情報を緻密に拾い上げ、膨大な研究量や、

様々な人たちが積み上げてきた成果があって、歴史を紡ぐことができたのだと思います。だから



こそこうして古代に想いを馳せることができ、ロマンを感じることができるのだと、再確認することができました。同時に、それに関わることはどんなに誉れで、そしてどんなに面白いことだろうかと感じました。

また、川崎市市民ミュージアムでは遺跡展と同時に「古代の瓦は語る」という企画展示も見ることができました。こちらの展示では橘樹郡衙と密接な関連があったであろう影向寺遺跡から出土したという瓦が展示されていました。様々な種類がありましたが、形状や模様の違いから、時期や用途を類推することができるようでした。近くの展示パネルには、今の川崎市の地域と、古代の川崎市の地域とがわかりやすく説明されていて、あまり予備知識のなかった私でも理解することができました。パネルの使い方や展示方法の工夫ひとつで、来館者の理解度も変わってくるのだと身をもって感じました。

また、瓦の展示の他にも「版築」という土を強く突き固め、建物の基礎部分を堅固なものにする技法が行われた様子を示す遺構の剥ぎ取りが展示されていました。こちらは川崎市教育委員会の栗田さんが、使われずにしまっていたのを偶然発見され、せっかくだから来館者に見てもらおうと引っ張りだされたもの。版築が行われたといった土の状況を、直に見るのは初めてでしたのでとても印象的でした。他にも、今回の見学では高屋敷さんや栗田さんから展示物にまつわる裏話なども聞くことができ、とても有意義な時間を過ごすことができました。このような見学会を開いていただいて、ありがとうございました。

平成 28年度 第 40回
神奈川遺跡調査・研究発表会
参加記 工藤 悠大

2016年11月13日(日)、横浜市歴史博物館において第40回神奈川県遺跡調査・研究発表会が開催されました。当日は天気にも恵まれ、会員の皆様を初め多くの方が来場されました。

調査・研究発表は9つあり、県内のうち8市で行われた調査・研究内容が発表されました。このうち、秦野市の葦毛小林遺跡—秦野市の槍先形尖頭器製作址—の報告では、市内でも最古の旧石器時代の事例として、また槍先形尖頭器の製作址として、重要であると感じました。川崎市の橘樹郡衙跡 [千年伊勢山台遺跡] 第16~20次調査—平成27年度橘樹官衙遺跡群確認調査事業の成果

—の報告では、以前の調査の結果と照らし合わせ、橘樹郡衙遺跡群の主要施設の想定が提示されました。今後の調査にもよりますが、橘樹官衙遺跡群の全容解明が期待されます。秦野市の横野山王原遺跡—秦野地方の富士山宝永大噴火の被害と復興—の報告では、調査区全体で発見された近世の宝永火山灰の廃棄遺構が非常に興味深いものでした。非常に規模が大きく、当時膨大な労力をかけて耕作地を復旧したことがうかがえました。県西部において同様の遺構が発見されているということでしたが、他県における事例なども気になる場所でした。

これらだけでなく、いずれの発表も興味を惹かれるものばかりでした。また、第40回という一つの節目ということもあり、午後には会場がほぼ満員と大盛況のうちに終わりました。

入手困難となった本会の刊行物がダウンロード可能となりました

本会旧刊行物が「全国遺跡報告総覧」(<http://sitereports.nabunken.go.jp/ja>)からダウンロードできるようになりましたのでお知らせします。県内最初の団体となります。

執筆者の承諾が得られた刊行物から順次公開していきたいと考えていますが、次の執筆者等の連絡先が不明となっております。ご存知の方がおられましたら、本会までご一報いただければ幸いです。(順不同・敬称略)

阿曾正彦・林章・安藤洋一・佐藤誠・向原崇英・山口隆夫・町田洋・江島秀木・柳谷博・難波明・伊藤潤・石丸熙・永井路子・大川康裕・早田利宏

以下は、ご家族の方の連絡先

小島弘義・赤星直忠・服部清道・江坂輝弥・吉田章一郎・稲生典太郎・榊原松司・奥田直栄

編集後記

今回は、昨年5月に資料館が開館した国指定史跡神崎遺跡の取り組みについて、綾瀬市教育委員会の井上洋一さんにご寄稿いただきました。近く、当会の見学会でも訪問予定ですのでぜひご参加ください。また考古学雑誌では、長年大和市の文化財保護に尽力されてきた曾根博明さんから文化財行政の表と裏に迫る貴重なお話を伺うことができました。工藤悠大さん、片山翔太さんのお二人からは若さ溢れる参加記もお寄せいただきました。本年も神奈川県考古学会をよろしくおねがいいたします。

考古かながわ 第57号

発行 神奈川県考古学会
発行日 2017年1月20日
編集 連絡誌部会：桑原・高橋・古田土・工藤
印刷 (有)湘南グッド
発行者 神奈川県考古学会 会長 岡本孝之
郵便振替 00240-9-71208
E-mail soumu@koukokanagawa.com
URL <http://www.koukokanagawa.com>

